

2014年3月7日

ベトナムで枯葉剤に苦しむ人の支えとなるために

田中

「かわいそうに・・・」

ベトナムの繁華街ホーチミンの中心を走る歩道の隅で、目の不自山な老女が幼い子供を抱えてうずくまっている光景を見た日本人の一言だ。その一言が私にとって、このベトナムという国の素顔に触れる、ほんの些細なきっかけとなった。

2014年1月中旬、私が勤める会社の取引先より招待を受け、全国から約70人が集いベトナムへ懇親旅行に出掛けた。仕事に関わる会議等の予定はなく、観光やショッピングといった予定が組まれており、ほとんど遊び気分で参加したような旅行だった。初日の夜、宿泊先のホテルとは別のホテルのフロアを貸し切りウェルカムパーティーが開催された。華やかなベトナム衣装を身にまとった女性がステージを彩り、様々な企画が催されたパーティーは盛大に終わった。その後、意気投合した参加者と共に、夜の街へ散策に出掛けた。その時、歩くその先の街灯の下に人影が見えた。よく目を凝らすと目が見えていないであろう年配の女性が、幼い女の子を抱え、じっとしたまま動かない。お互いが離れないようしっかりと身体を寄せ合い、「決して離さない」。そんな想いが見て感じ取れた。その次の瞬間だった。

「かわいそうに・・・」

聞こえるか聞こえないか分からないくらい小さなその一言は、自然と頭の中でこだまし、しばらく消える事はなかった。誰が言ったのかも分からない、本当に誰かが発したものなのか分からない。ただ、間違い無く彼女達を見て発した言葉に違いなかった。

その時、同時に私の中で私自身に問い掛ける言葉もあった。

「本当にかわいそうなのか？」

親子が一緒にいられる事に、彼女達は幸せを感じているのではないだろうか・・・

答えは今も分からないまま、自問自答し続けている。

旅行は次々と観光地を巡り、途中戦争証跡博物館を訪れた。私にとってそこが今回の旅行の全てとなったと言ってもよい。博物館の外には戦争に使用された戦車や戦闘機などが堂々と展示されていた。そして、博物館の中に入るとベトナム戦争の様子をありのままに記録している写真が次々と目に飛び込んできた。これらの記録が、わずか40数年前にこの地で起こっていた事実かと思うと、言葉が出ない。あまりにも残酷で、今の平和な日本の現状からは全く想像も出来ない世界が、展示写真から目に飛び込んできた。それぐらい迫力があり、また展示する立場の人も現状をそのまま伝えたいのだろうという気持ちが伝わってくる。人の生首をぶら下げる兵士の写真、死体が無数に倒れる路地、銃口を頭に付きつけられた女性の写真など。目を背けたくくなる様な写真が、次から次へと展示されている。

更に最も私が衝撃を受けたのは枯葉剤による影響を受けた子供達の写真だ。身体の一部

が無かったり、二人の子供の身体がつながっていたり、下半身が大根の様な形をしていたり、その有り様は人のものとは思えない程、酷なものだった。私事ではあるが、ほんの数ヶ月前に子供を授かったばかりだった。その子供がもしもこの様な形で産まれてきていたら…。一体誰にこの思いをぶつければいいのだろう。枯葉剤を撒いた米兵か、戦争を決断した当時の米大統領か、ジュネーブ協定の関係者か、枯葉剤を浴びた父親(私)か、母親か、そもそも自分の子供は産まれてこなければ良かったのか…。同じ人間が犯した過ちにこんなにも苦しい想いをする事はどれだけ辛い事なのだろう。自分ならまず耐えられない。耐えられない。

アメリカ軍は、1960年代のはじめから約10年間、南ベトナム各地で枯葉剤を空から森へ撒いた。南ベトナムの森の60%以上が、枯葉剤におかされ、その枯葉剤にはダイオキシンが含まれていた。ダイオキシンは1gで2万人もの人を殺すほどの毒。種類は200種類余りあり、その中で最も強い毒をもっているものが、ベトナムで使われたという。猛毒のダイオキシンは、枯葉剤の液体1トに10g含まれる。それを約9万トも使っていた。

ベトナムのある病院が毎年とっている統計では、1990年に入院した母親の数は20,848人、その内未熟児、母親のお腹で亡くなった子供、奇形児など何らかの異常が現れた割合は約2割近いそうだ。

その現実が戦争証跡博物館にありのまま写真として展示されている。しかし、私が目を反らしたくなるその写真をよく見れば分かる。彼らは笑っている。手がない身体でも足で筆を取り懸命に学んでいる。そう、彼らは生きているのだ。私は生きる事の素晴らしさをこれ程力強く感じたのは、これが初めてかもしれない。そこに至るまでの彼らの並ではない努力、彼ら家族の思いやりの全てを想像すると、言葉に詰まる。生きる事の意味が全てそこにあるような気がして。

世の中は平等じゃない。だからこそ、恵まれて産まれた私達が彼らに寄り添う道を真剣に考えなければいけない。そしていつか彼らが私達の子供の友達となり、輪が広がり、その輪が人として生きる希望となる。世の中は決して平等じゃない。だけど、手を差し伸べてくれる人は必ずどこかにいる。それに自分になるかならないかだ。安心して暮らせる平和な国に産まれた事を当たり前と感ずるなかで、彼らの現状を知った今ただなんとなく生活している事に違和感を感じる。誰かの役に立つ為に人は生きなければならない。それを待っている人がただ、目の前にいないだけなのだ。先に述べた様に、戦争の影響を受けたと思われる人は、ベトナムにはまだまだたくさんいる。彼らと直接話せなくても、会えなくても、ほんの少し今出来る何かを彼らに届けたいと思う。



